

今回のエッセイのテーマは「あなたの好きなコンテンツについて語ってください」だ。

私は初め、自分の好きな小説について書こうと思った。しかし、あまり話したくなかった。親しくない人に自分のプライベートな話をしたくないし、私自身のことをあまり知られたくないからだ。

ということ、ここでは他の人の好きの間に挟まる閑話として、「好き」についてほんの少し考えて煙に巻こうと思う。

「好き」について辞書を引くと、次のように書いてあった。

「心を惹かれること、その様。」

貴方の心を代弁しよう、ふざけるな。意味に言葉自体と殆ど同じようなことを載せるな。しかしこれは仕方のないことだ。例えば「赤」という言葉を引いたとき、

「赤い色をしていること」などという意味が出てくるだろう。少し立ち止まって考えようと、赤をどう説明してよいかは確かにわからないのだ。色の分け方は十人十色であり、この波長の光を赤とする、などということは決めにくい。より根源的なものは辞書によって引くことはできないのだ。

しかし、私たちは「赤」を知っているし、「好き」を

知っている。これはどうしてだろうか。

意味論の話に持っていくと余白が足りないため、今回は「好き」という感情に絞って考えていこう。

保険の授業で人には一次感情として快と不快が発達すると教わった。そこから感情は発達していくため、好きは快の発露としての感情かもしれない。マズローの欲求五段階説を片手に典型的な好きを検証していこう。

恋人が好き、という感情はどうだろうか。これは性欲を満たす相手として生理的欲求、愛を与え合う相手として社会的欲求にあてはまりそうだ。また恋人がいるというステータスを持つための承認の欲求も当てはまるだろう。愛の与え合い、性欲発散、承認の欲求に、恋人が好きは還元できるだろうか。

音楽が好き、はどうだろうか。いつも全く変わらぬリズムを刻み音を奏でるので安定しているという点で、安全の欲求を満たしうる。その音楽が好きという集団の中に入れるという社会的欲求、ある音楽が好きというステータスを得るための承認の欲求、その音楽を奏でたいという自己実現の欲求……。音楽が好きはこの欲求を満たす感情だとまとめてもいいのだろうか。

これはいささか暴力的と言わざるを得ない。あまりの還元主義的アプローチだ。「好き」に付随しているその人の体験や感動を無視している。

パンを加えた女の子と角でぶつかったとき、私はたぶ

んその場で「運命かも！」とその子のことが好きになるが、これは欲求とかではなく、このこと運命を感じるからだろう。

また、欲望は、欠乏感や不足を補うための動機として働くが、好きはもつと深い意味を持つ。好きなものに対しては、たとえそれが時に苦しいものであっても、自己実現や充足感につながる側面がある。

快と不快のような話では好きの一面しか語れなかった。では次に、好きという感情を差別化してみよう。

高校現代文の教科書にソシュールの言語論が載っていた。曰く言葉は形のない世界を切り分けラベル付けしたものでらしい。反論などはともかく、私はこの考え方が分かりやすくとても好きだ。

好きと似たような概念は何があるだろうか。愛や恋はこの文章の中では好きに包括されているとする。「好きは自分を見ている、愛は相手を見ている」などとよくわからない修辭的な表現は恋愛小説で十分だ。

たとえば、「共感」という感情も、好きの一面として挙げられる。共感とは相手の考えや感情を理解し、共有することによって生まれる。そのため、共感によって生じる好きは、相手に対する親しみや安心感を伴う。しかし、共感だけでは好きとは言い切れない。人は必ずしも共感する相手を好きになるわけではないし、逆に好きなものに対して共感できないこともある。

また、安心感も好きの中に含まれることがある。たとえば、長年の友人や家族に対する好きには、心の拠り所としての安心感が大きな割合を占めていることが多い。

この好きは、新鮮さや強い感情の高ぶりというよりも、安定した関係の中で育まれるものだ。こうした好きは時間とともに深まり、むしろ慣れることで意識されにくくなる。

こうしてさまざまな「好き」を並べてみると、好きという感情は単純なものではなく、多様な要素が絡み合っていることがわかる。好きの根底には、共感や憧れ、安心感などが複雑に絡み合っているのかもしれない。

結局のところ、好きという感情は、ひとつの言葉に収まりきれないほど広がりを持っている。ソシュールの言語論にならうならば、私たちが「好き」と呼んでいるものは、無数の感情をひとまとめにした便宜的なラベルにすぎないのかもしれない。

しかし、『結局複雑で人それぞれだよ』は結論として凡庸だ。仕方がないのでもう少し考えてみよう。

次は好きが外発的なものか内発的なものか考えてみよう。

これは私が週一で考えてることだ。貴方が、例えば音楽が好きだとして、それを好きになった明確な根拠はあるだろうか。例えば特定の音楽を聴くことで周囲の人々からの評価を得たい、あるいは流行に合わせて聴いてい

るなど。これらは外発的な好きと言える。曖昧ならばそれは貴方が貴方だからこそ、好きになったのだらうか。自分の感情や経験に基づいて、何も期待せず、ただその音楽を心から楽しんでる状態なのだらうか。

社会的動物として、他者の存在を意識しないことはいだらう。ということは真に内発的に好きになることはないだらう。

好きという感情が外発的、つまり他者の影響で変わってしまうのならこれは好きというより外界に適応しているだけではないだらうか。これは好きとは言えない。主体的に「好き」を選び取るためには外界の否定をしなればいけない。ではこの否定が依拠するところは何だらうか、これは別の好きや周りの環境、そのほか他者の影響ではないか。根源的に人間が内発的なことは生理的欲求のみで教育、環境、遺伝など自分で選べない外発的なものが基になって自身が作られているかもしれない。では私の、貴方の真に自己といえるもの何だらうか。

という疑問たちは置いておいて、「好き」には自己が必要、主体的に好きという感情を選び取る必要があるかもしれない。

つまりは「好き」と感じるものには、ある意味で自分の意識や選択が深く関わっているということだらうか。たとえば、ある音楽や本、食べ物を好きになる過程で、

無意識に自分が何を求め、何に惹かれているのかを選び取っているはずだ。しかし、これが本当に「自由な選択」なのか、あるいは外部の影響によるものなのか、という疑問も残る。

社会的な影響や文化的な価値観が、私たちが「好き」を感じるものに大きな役割を果たすことは確かだ。しかしその中で、自分の内面に問いかけてみると、外部の影響を受けながらも、最終的には自分の感情や経験に基づいて「好き」という感情を選び取ることができるのではないか。つまり、「好き」は単なる反応ではなく、「自己」の意識的な選択の結果として成立するものだという考え方だ。

この選択的な側面は、自己の価値観や経験、個人の感受性に基づいて「好き」が形作られることを意味する。たとえば、流行に合わせて何かを「好きだ」と言っても、その背後にある自分の感情や意識的な選択がある限り、それはただの「周囲への適応」ではなく、自己の一部として選ばれた好ましいものになる。この自己選択的な「好き」が、真の意味での主体性を持つ「好き」だと言えるのではないか。

しかし、これは簡単なことではない。社会的な圧力や他者の期待が常に存在し、それが私たちの「好き」に影響を与えることも多い。そうした中で、どれだけ自分の本当の感情を選び取ることができるかが、重要な課題と

なる。

また、「選び取る」という行為自体が、自己の成長や変化とも関わっているのではないだろうか。人は年齢や経験を重ねること、何を「好き」だと感じるかが変化することがある。これもまた、自己が持つ変容の過程を反映しており、「好き」という感情が単なる一時的なものではなく、深い自己理解の一部として形成されることを意味する。

結局、「好き」という感情は私たちがどれだけ主体的に選び取るか、そしてその選択がどれほど自己の深い部分に根ざしているかに大きく依存していると言えるだろう。だからこそ、「好き」という感情は決して単純なものではなく、常に自己との対話や探求を通じて形成されるものなのだろう。

と、あまりはつきりとしたことは言えずに、くねくねと考え続けてしまった。

しかし、ある人がいうには「気が付いたら、時間を使ってしまったているモノやコトが好きな物事」らしい。ここまで読んでくれた貴方はきつと、文字を読むことと考えることが好きなのだろう。おそらく。たぶん。きつと。

それでは閑話休題。次の作品へお進みください。